



第5回

昔の技術で
やってみました！

尾根道で 数百年間残る 「段築」に 迫る！

意外な
中世以前の交通！

江戸時代以降に主要な道として使われた東海道をはじめとする街道は、比較的平坦な場所を通っていた。しかし、愛知県下の古道を調査され、『忘れられた街道』（風媒社）を著された中根洋治さん、共同研究者の奥田昌男さん、可児幸彦さんによれば、戦国時代

古道整備技術（前編）

人びとや物資が絶え間なく行き交う道路。私たちが生活するうえで道路は欠かせない社会基盤である。現代では身の回りにアスファルト舗装の道路がいきわたっているが、明治時代以前にはもちろんアスファルト舗装のような技術はなかった。しかし、現存する古道を歩くと道路整備の形跡が見られ、その一つに「段築」と呼ばれるものがある。今回は、尾根上の古道が多く発見されている愛知県周辺に存在した中世以前の交通に触れながら、当時の重要な道路構造の一つであった「段築」について紹介する。

以前はどうも平坦な道ではなく、尾根筋の道が遠距離移動のための主要な街道として多く使われていたようである。

現代の常識で考えると、「なぜわざわざ尾根筋を」という疑問がわく。しかし、尾根沿いの道が選ばれたのには十分な理由があった。それは、①敵兵や獣に対して高い位置の方が有利、②見通しが良いため（往時は尾根筋の脇に木

が少なかった）、方向の確認ができ、事前に洪水や敵の状況などがわかる、③湿地や川の横断が最小限で済む、④落石の危険がない、などといったことである。このような理由から、尾根筋は商人の移動や物詣といった利用のみならず、戦国時代には兵の移動にも利用されたと伝えられている。そして、江戸時代になり平和が訪れ、敵を気にする必要がなくな

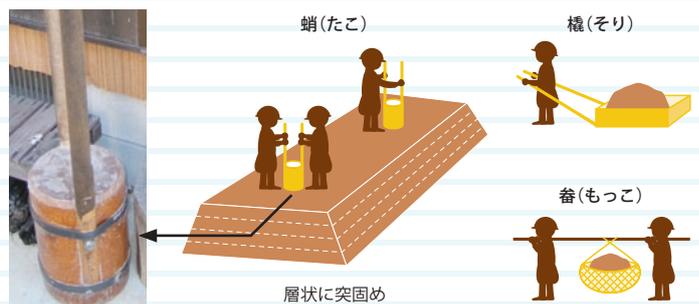


図2 段築施工のイメージ



写真1 段築法面の勾配測量(7分勾配)

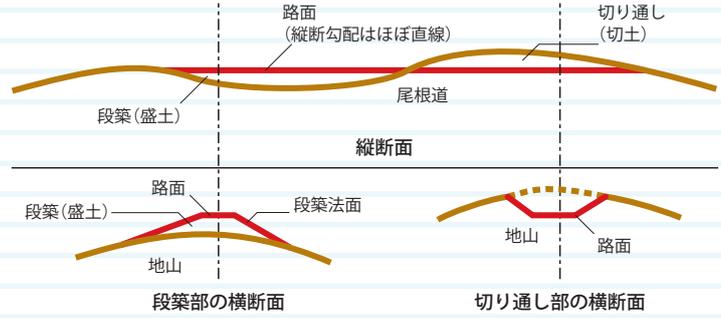


図1 段築のイメージ図

ると、やがて人びとは中腹の道や川沿いのより平坦な道を利用するようになっていった。近年では尾根道の存在を知る人はほとんどいなくなっている。

今に残る段築

前述したように、中世以前は尾根道が重要な道路インフラとして機能しており、その整備に力が入られていたとされる形跡が、現存する尾根道に見られる。その代表的なものが「段築」である。段築とは、「尾根筋の鞍部」に何層にも分けた土層を突固めて構築した盛土部」のことを言っている。多くの段築に見られる特徴として、法面が

急勾配(1割勾配以上)であることが挙げられる(写真1)。また、縦断勾配がほぼ直線なのだ。その事実を知り私はふと、こんなことを思った。現代の高速道路では下り勾配から上り勾配に変わるサグ部がボトルネックとなり渋滞を引き起こしやすい。もしかしたら当時の人びとはそのような知識をすでに持つていて、何万ともいう兵、武器、兵糧などをスムーズに移動させるため、中だるみ避け縦断勾配を直線にしたのかもしれない。

段築の施工方法

実は段築について記された文献はほとんどなく、誰がどのようにして構築したのかはあまりわかっていないが、地元民による労働集約的な技法により、何層にも分けて突固められたと推定される。段築部前後に切り通し(切土部)・写真2)が見られることから、切り通しおよび近辺から切り取った土を檜や畚(麻綱を網目状に編んだもので運び段築盛土材料として利用していたと考えられる。また、突固めには、蛸(たこ)の殻のような堅い木に柄を付けたもの、杵(きね)や人足が用いられたと考えられている(図

2)。突固める際には土が外側へ膨れていかないように丸太等によって押さえた可能性もあるといわれる。しかし、このような手作業のみで本場に道路としての役割を果たすだけの構築ができたのだろうか。いやいや、それはやってみなければわからない。まさに次回記事のテーマである。

現代における尾根道の役割

段築の法面は非常に急勾配にもかかわらず、数百年経った現在でもほとんど崩れずに残っている。これはおそらく段築の施工方法だけでなく、往時の街道として排水の容易な尾根筋を選んだことと自体が有効であったものと考えられる。道路整備においては、道路施工技術だけでなく道路計画技術がきわめて重要であるということを強く感じた。

また、「尾根を通る古道は現代においても非常に重要な役割を果たしている」と中根さんたちはいう。1972(昭和47)年7月の豊田市北部を襲った集中豪雨では、小原の山村が孤立状態となった。現地へ向かう県道は橋をはじめ、あらゆるルートが閉ざされ



写真2 切り通し(切土部)

通行不可能であった。その際に中根さんが被害状況調査のために利用した尾根道には、水害の翌日もぬかるんだところはなかった。尾根を通る古道は災害時の緊急連絡路として利用できる可能性が大きいのだ。私たちは尾根道についてはほとんど何も知らない。尾根道に関する知識が完全に忘れ去られてしまつ前に、まずは「知る」ということが私たち学生に課せられた役目ではないだろうか。

学生編集委員 松尾 幸二郎
辻本 剛士

次号予告

次回は学生班が、蛸や人足を用いた突固めによる手づくりの段築づくりに挑戦する。果たして、人びとの移動に耐える道路ができるだろうか。乞うご期待!!